

図書館だより No. 1

平成 26 年 4 月 25 日発行

遅くなりましたが、1年生のみなさん、入学おめでとうございます。そして、2、3年生のみなさん、進級おめでとうございます。4月も終わりに近づきましたが、新生活にはもう慣れたでしょうか。特に1年生は初めてのことづくしの1ヶ月だったと思います。これからの高校生活では、多くのことを経験、吸収し、大きく成長してください。

図書館では今年度もみなさんが多くの本と出会えるようお手伝いをしていきます。本に親しんでいる人だけでなく、今まで本とは疎遠な生活だった人も「本って、おもしろいんだな」と思えるきっかけを作り図書館へ足を運んでください。待っています。

さて、8日に2014年本屋大賞が発表されました。今回の対象は和田竜さんの『村上海賊の娘』(新潮社)です。図書館でも展示しているので、ぜひ読んでください。本屋大賞は“書店員が選んだいちばん！売りたい本”だけあって、大賞だけでなくノミネートされた本も含め、どれもが読みやすくおもしろい本です。

春におすすめ*

913.6-セ『春、戻る』 瀬尾 まいこ || 著 集英社

結婚を目前に控えたさくらの元に現れた兄を名乗る人物。だけど、さくらには兄はいないし、生き別れになった兄の記憶もない。しかも、どう見ても自分より随分と年下。だけど、なぜか自分のことをよく知っている。そんな“おにいさん”に警戒心をあらわにするさくらだけど、人懐っこく結婚にあれこれ口を出してくるおにいさんのペースに巻き込まれ、妹として扱われながら、お節介をやかれてしまう。そして、あきれながらも、おにいさんのお節介に付き合ううちに、いつしか本物のおにいさんに接するように心を開いていく。

おにいさんは一体誰なのか。それを解く鍵は、さくらの心の奥に潜んでいるのですが、さくらは自分の心と向き合い、答えにたどり着けるのでしょうか。春に読むのにおすすめの、優しさのつまった本です。

2014 本屋大賞ノミネート作品*

913.6-ツ『島はぼくらと』 辻村 深月 || 著 講談社

瀬戸内の海に浮かぶ^{きやしま}牙島。島に高校はなく、^{あかり}朱里、^{きまか}衣花、^{げんき}源樹、^{あかり}新の4人は高速船フェリーで本土の高校へ通っている。たった4人の同級生だから、タイプは違うけれど、自然と一緒に過ごすことが多い。そんな彼らも少しずつ大人へと近づく年頃となり、1ターンで島へ移住してくる人たちが持つ痛みに触れたり、島の大人たちの間にある確執に気がついたり、様々な経験を重ねていく。小さな島だからこそ感じる人の温かさ、もどかしさ。その両方をそれぞれが受け止めながら、島で生きる自分たちの未来を描いていく。

人と人との絆が結ばれていく様子は読んでいて、心がホッとします。



図書館の開館と貸出について

1年生もだんだんと図書館の利用に慣れてきたでしょうか。3年間を通し、図書館をフル活用してください。ここで、2、3年生も含めた全校生徒のみなさんにもう一度、図書館の開館と貸出について案内します。

開館日: 月曜～土曜 ※ 日・祝日は休館です。

開館時間: 通常 8:50～18:45 (※月曜は10:15より開館)

考査1週間前 8:50～17:30

考査中 8:50～17:00

土曜日 8:50～17:00

※学校行事及び長期休暇中の開館に関しては、その都度、お知らせをします。

貸出冊数: 3冊 **貸出期間:** 新着本* 1週間 その他* 2週間 (雑誌も最新号以外は貸出可です)

みなさんの持っている生徒証が図書館の利用証となります。この生徒証があると貸出がスムーズに行えますので、用意をお願いします★
なお、1年生は生徒証が渡されるまでの間、仮の生徒証にて対応します。



図書館ってこんなに素敵なんです*

090-セ『世界の夢の図書館』 エクスナレッジ

図書館という建物自体の魅力、そして、蔵書のコレクションや設備といった空間としての魅力、その両方の面から図書館を紹介した本です。載っているのは、世界最高峰の37の図書館。そのどれもが図書館のイメージを大きく変えてくれるまさに“夢の図書館”です。

特に素敵なのは、まるで美術館を訪れたような気持ちになれる芸術的価値の高い図書館から、近未来的でスタイリッシュな図書館まで館ごとに異なる魅力を放つ建築デザインです。オールカラーで載せられている図書館の写真を眺めると、うっとり魅入ってしまいます。「この図書館ではこんな風に過ごしたい」とそれぞれの図書館に思いを馳せながら、ページをめくってください。

図書館のパソコンが新しくなりました

図書館にある18台のパソコンが4月から新しくなりました！！OSはパソコン室でみなさんが使っているものと同じWindows7です。

使い方は今までとほぼ変わりありませんが、画面が大きくなり、キーボードも打ちやすくなりました。引き続き、調べ物に役立てたり、DVD鑑賞を楽しんだりしてください。ちなみに、図書館のパソコン内にはデータを保存することができませんので、注意してください。その他、使い方がわからなくなった時には、声をかけてください。

☀️ 未来を切り開くためのキーワード ☀️

図書館だよりでは1年ごとに特集を組んでいます。昨年度は、『世界と旅する12ヶ月』と題し、様々な国とその国に関連した本を紹介してきました。そして、今年度は『未来を切り開くためのキーワード』と題し、みなさんがこれからの人生をよりよく送るために今からできること、考えておくべきことをキーワードとして挙げ、関連した本を毎月紹介していきたいと思います。

第1回目の今回のキーワードは“**先人に学ぶ**”です。人生には、たくさんの先輩がいます。先人の残した言葉や発見、そして、生き方から、自分の未来の道しるべとなる何かを掴み取り、自分の世界を広げていってください。



どの言葉にグッときますか

159-ザ 『座右の銘』 「座右の銘」研究会 著 実業之務社

古今東西の様々な名言が1冊に集められています。ことわざあり、名句あり、格言あり、心に留めておきたい言葉にたくさん出会えます。知っている名言を改めて読み返して、その言葉の持つ意味を感じたり、パッと惹かれる言葉を見つけてワクワクしたり、先人の残した言葉との出会いを楽しんでほしいです。

1ページ目から、流して読み、好きな言葉を見つけるのもよいですが、細かくテーマ分けされているので、自分の気持ちや悩みに合わせて、読むページを選ぶこともできます。今の自分にぴったりの言葉だけでなく、友だちや家族など自分の周りの人を思い浮かべながら贈る言葉を探してみるのもよいでしょう。

生き抜くんだ！！異国に流され、遠い日本に帰るまで

289.1-ナ 『ファースト・ジャパニーズ ジョン万次郎』 中濱 武彦 著 講談社

ジョン万次郎の名で知られる中濱万次郎のことは、みなさんどこかで知っていると思いますが、改めて彼の送った人生を辿ると、鎖国という時代に田舎のいち漁師の子であった彼が体験したことや成し遂げたことのすごさを感じます。

150日にも渡る漂流生活では生きるための知恵をしばり、救助された米国船では臆することなく船員たちとコミュニケーションをとり、アメリカという異国の地では学問に勤しみ、10年越しに日本への帰国を果たした後は開国のために力を尽したジョン万次郎。どんな環境下でも前向きに行動し、広い視野で物事を捉え、自分の為すべきことを見いだせる素質を持った彼だったからこそ、漂流という不運に合いながらも生き延び、日本を開国へと導くための大きな役割を果たせたのでしよう。その生き方には見習うべきとことがたくさんあります。

女性初のノーベル賞受賞者

289.3-キ 『マリー・キュリーの挑戦』 川島 慶子 著 トランスビュー

「その人は、女だった。他国の支配を受ける国に生まれた。貧しかった。美しかった。」

マリー・キュリーの事を、その娘エーヴ・キュリーが言い表した文章です。キュリー夫人がラジウムなどの研究で、ノーベル物理学賞と化学賞を受賞したのは有名ですが、その栄光の裏で乗り越えなければならなかったのは、女性が学ぶことへの偏見と、ロシア・オーストリア・プロイセンに分割支配され、国としての存在を失ったポーランドの出身で異国フランスに研究の場を持つということと、貧乏な生活についてだったことは知られていないのではないのでしょうか。苦難を乗り越え、人々のためになると信じる研究に没頭した彼女がいたからこそ、いま、世界には女性科学者が自由に活躍できる環境があるのです。ぜひ、その強さと美しさについて知ってください。

🚢 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 🚢

新着本コーナーを眺めている時間は、いつも「あれもこれも読みたい！」と心が弾む幸せな時間です。今月はそんな新着本の中から垣谷美雨さんの『あなたの人生、片付けます』(913.6-カ 双葉社)を読みました。「人生を片付けるって!？」と書名にドキッとしたのですが、中身はいたって平和。片づけ屋と、その部屋の主たちとのやりとりを描いた小説です。

片づけ屋の大庭十萬里。見た目はごく普通の主婦。愛想は、あまりよくない。それでも、片付け屋としての腕はピカイチ。片付けられない部屋の原因を部屋の主たちの心の中から見つけ出し、的確に解決していきます。最初は勝手に家族に依頼されてやってきた十萬里に対し、反発的な部屋の主たちも十萬里の片付け指導をきっかけに心に抱えたものをゆっくりほぐしていきます。

読んだ後は、…もちろん部屋の片づけをしてしまいました。 【今井】



今年の夏に公開予定のスタジオジブリの最新長編アニメ『思い出のマーニー』が気になって、その原作『思い出のマーニー』 ジョン・G・ロビンソン 著(933-ロ 岩波書店)を読みました。

イギリス児童文学の古典的名作と監督の米林宏昌さんも言っていましたが、イギリスの景色や雰囲気が作品世界に美しさと温かみを加えて、なじみのない国が舞台であっても、なぜか親しみを感じられる物語でした。ロンドンから転地療養のために訪れたノーフォークには、“しめっ地”とよぶ低湿地やボートで行き来できる入り江(クリーク)それに砂丘や草原と、ひとりで過ごすには良い場所がいろいろあります。ロンドンでは特に仲のいい友達なんかいたこともなかったし、そのことを別に気にもしていなかったから、ここの暮らしはかえって気楽で気ままでした。けれど、いつの間にか入り江に面して建つ“しめっ地やしき”が気になるようになり、そこに住んでいるらしい女の子と仲良くなります。アニメでは舞台を北海道に変えるようですが、ポスターで見るマーニーのイメージは原作の小説そのままのような気がします。ただ、マーニーは主人公じゃないんですね。少しだけネタバレですが。 【鈴木】